

# 農業土木を 支えてきた人々

## 仙台藩の偉大な技術者川村孫兵衛二代記

板 橋 瑞 夫\*

### ひとつの出会い

関ヶ原の戦いが済み、ようやく泰平のきざしが見え始めた慶長6年(1601)のある日、近江国蒲生郡のとある民家でひとりの武将とふたりの若者が静かに会談していた。

木の間から洩れる日ざしがまぶしい。障子はあけ放つてあるが話声はよく聞こえない。

時折り季節はずれの簀うぐいすが鳴いている。

武将の片目はつぶれていた。奥州の雄仙台藩主独眼流伊達政宗である。

「これで決まった。」

政宗は膝を叩いて声高にこうつけ加えた。

興奮した時の彼のいつもの癖である。

「今や天下も治まって世は平和な時代を迎えた。これからは再び干戈を用いることもないであろう。ところでわが奥州の地は広大でよく土が多い。そこで、これを開墾して人民の福利を増したい。ついてはおことらの力を是非煩わしたい。」

一藩の大事を委せられたふたりの若い血は、感激に躍っていた。若者の名は川村孫兵衛重吉といい、もうひとり重吉の友人の山崎平太左衛門である。

由来、偉人にまつわる奇説は数多い。

川村孫兵衛祖孫ともに異相を有していたと伝えられている。すなわち、重吉の祖父常吉は左脇に竜鱗があったので、コケラ孫兵衛と呼ばれ、重吉もまた四つの乳房を具えていたという。真偽のほどはさだかではない。

だが、それは別としても隻眼の政宗と四房の重吉との新主従はここに肝胆相照らす何ものかがあったのではあるまいか。

徳川氏の覇業ようやく成り、海内の統一が行われると諸藩は皆こぞって治国経民の策を講じた。

藩政時代は全般に農業中心の時代で、農は国の基なり

と唱え土農工商の制を敷き、農業が重んぜられた。

この時代とくに全国的に農業の振興を図ったのは、8代將軍吉宗(1716~1745)および11代將軍家斉(1786~1837)の時代である。

ところがわが仙台藩においてはそれ以前、徳川幕府が開府されるや世は安定時代に入ったことをいち早く見極め、直ちに藩の財政経済の基礎を農業におき、その収入増加を図るため積極的に荒蕪地、湖沼、沼沢地の開墾、干拓工事並びにこれに伴うえん堤、タメ池、用水路等の工事を実施して良好耕地の拡張を実施したばかりでなく、既耕地の用排水改良をもあわせ行った。

その経緯の雄大にして永遠なることけだし伊達氏の右に出づるものなしと誌史は伝えている。

このことは、仙台藩の表高620,056石の実収米石高が、年々開田によって良田を得るごとに幕府に正式に届出したものだけでも天保9年(1834)の調査によれば394,524石余あり、以来安政3年(1856)までにまた14,906石余を開墾し、都合1,029,486石余にのぼったことでも頷けるであろう。

かくして、“三十五反の帆を巻き上げて、行くよ仙台、石巻”と、かの遠島甚句に歌われるほど仙台藩産のいわゆる仙石米は江戸の米相場を支配するまでに至り、良質米産出王国を謳歌することになったのである。

当時の築造になる頭首工、用水路などで今なお満々たる清流をたたえ重大な役割を果たしているものは枚挙にいとまがない。

これらの主要工事にきまって名を連ねているのが川村孫兵衛である。

誌史は伝う。重吉土功に精しく富国利民の功挙ぐるに十指をして足らず、と。

川村孫兵衛重吉の土木施策は、単なる一地区一邑の開発ばかりではなく、藩全体の視野で見た雄大な総合開発の構想から発している。

今でいうならば、さしづめ広域行政の偉大なる先達で

\* 宮城県農政課耕地課(いたばし みずお)

あったのである。

次に、彼の経歴とたずさわった主な事業を挙げて見よう。

川村孫兵衛重吉は天正2年(1575)、長州阿武(萩)の庄に川村孫兵衛常吉の孫として生まれたが、なぜかその系譜には父の名を逸している。

祖父常吉は沈勇高潔な人格者で、毛利藩の普請奉行を勤めた土木技術の逸材であったといわれている。

重吉もまた幼時から聡明慧敏で非凡の秀才、長ずるに及んで数学、土木工技、水利天文、測量、採鉱、植森等の学問を修めてこれに練達した。

そして、ゆくゆくは祖父の職を継いで藩政に奉仕するはずであった。

しかるに慶長5年(1600)関ヶ原の一戦に藩主毛利輝元が豊臣方に加担したため、徳川家康によって但島国外7カ国の所領を没収されたので、重吉一家はやむなく阿武の庄を脱して近江国蒲生郡に流寓していた。

この蒲生郡5,000石の知行は秀吉在世中伊達政宗にあててを約した所であったから、家康も秀吉の遺命を尊重して政宗の領を認めた。

かくて、政宗が慶長6年上洛の途次新采地蒲生の邑を訪ねた際、締役その他の進言によって陋巷に埋もれていた重吉の人となりと力量を聞いて召し抱えることになったのである。

重吉はその友人山崎平太左衛門とともに随身を承諾しおのおの1千石の旅禄を与えられ、初めて仙台入りをしたのが年齢25の時である。

さて、重吉は家族3人とともに山崎平太左衛門と相前後して仙台の地を踏んだが、最初に与えられた領地は名取郡下の郷早段邑(今の玉浦)であった。

しかして、平太左衛門は山野の土木に、重吉は平地、沿海土木に力を注ぐことになる。

重吉は忠を守って諛わず、職を努めて倦まず、溝キョを掘り、境界を正し、河川を開きえん堤を設け、カンガイの利を興して水旱の憂を除くなど皆後世を考慮して経営施設した。

郷六の四つ谷ゼキ用水の開設、品井沼干拓の潜穴排水、貞山堀の疎通の如きは今日に至るまで皆その利便を被っている。ことに政宗の命を受け北上川を牡鹿湊に導き石巻港を開くに至っては、彼畢生の大事業であつたらう。

これらの外、重吉はまた鉱山に精しく封内の山川土色を視察して能く金銀鉱を採見し、荒蕪の原野を開拓しては膏腴の美田となせるもの幾百町歩。あるいは海浜の地所々に長堤を築いて巨釜を置き塩を焼く等、世を益し公

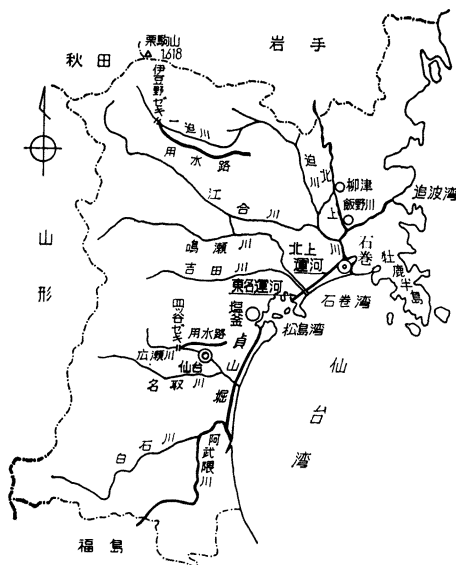


図-1 孫兵衛二代記関連宮城県図

に貢献するところ非常に多かった。

この故をもって後年采邑を磐井郡猿沢村、宮城郡小田原南目村、牡鹿郡大鈎村等数カ所を賜り、3千石を拝領した。

### I. 貞山堀の開設

試みに宮城県地図を開かれるとよい。大きな仙台湾に沿って内陸部に海岸線と平行する運河を見出すことは容易であろう。

この運河を名づけて次の三河に分かつ。

すなわち、阿武隈川河口から松島湾までを貞山堀と呼び、松島湾から鳴瀬川の河口までを東名運河と称し、それ以北、北上川河口までを北上運河と名づく。

仙台領の耕土は北上・阿武隈両川の流域を占め、中間に鳴瀬川があり豊饒な土地が多い。地理的にいう仙台平野であり、産米的な呼称では大崎耕土である。だが、両大河の河口は相距ること実に72km、途中に松島湾があるのみで他はいずれも太平洋の荒磯で波浪高く岸遠くして小舟をもって航行することができない。ゆえに、この三大河川を連絡すべき運河の開削は、領内の産米その他を石巻港または塩釜港に集め大江戸に輸送する興農計画の遂行上最重要な施設であった。

偉なるかな重吉の計画、そしてそれを採択した政宗の大英断。ここに運河は着々と築かれていくのである。重吉は命を受け勇躍してこの工事に当った。計画が成るや、まず阿武隈川の河口荒浜から名取川までの水路を一

気に開いた。だが、重吉一代ではこの全計画は完成しなかった。藩財政のひっ迫が災いしたのである。

重吉没後、その志を継いだ養子孫兵衛元吉らによって<sup>ゆりあげ</sup>閑上港から松島湾内を通じ塩釜港との連絡が成り、さらに松島湾内から東名運河を掘削して鳴瀬川の河口野蒜港<sup>のびる</sup>までの大運河を開き大いに舟運の便を整えた。その後、明治初年に至って鳴瀬・北上両川間を連絡する北上運河が完成し、重吉の計画が達成されたのである。陸上交通機関が不便であった時代であって、この運河の利用は絶大にして世を益したと想像に余りある。なかんずく、孫兵衛重吉が直接手がけた貞山堀は、伊達政宗の号貞山公からその名称を採っていて、藩を挙げての大事業であったと思われる。

貞山堀は、今は一級河川として本川を残すのみであるが、当時はこれより支線を開削して内陸部深く輸送網を設け、各所に舟入り、舟だまり等の地名を残しており、今の仙台市周辺では<sup>にがたけ</sup>苦竹の自衛隊仙台駐屯地北脇までも水路が延びていたことが文献からうかがえるが、今はわずかに古老の言と地表コウ配にそのおもかげをとどめるばかりで、残念ながら支線で現存するものはない。とにかく、産米輸送の体制は重吉の貞山堀開削に負うところが多い。今でいう産地直売方式の確立である。そのころの北海道は米作が浸透していなかったから、勢い江戸の米市場の競争相手は越後米であった。

越後米の舟運による大う廻、あまつさえ冬期の舟止めと陸路の難関は到底仙石米の敵ではなかった。かくして仙石米は質的優位に加え、量的にも價格的にも数等優位を保ち、結局は江戸市場を独占するに至ったのである。

## II. 四ツ谷ゼキの開削

慶長5年(1600)に始まった仙台城と城下町の建設は、岩出山から武士、町民を残らず引き移し、人口5万人の都市をつくるという大規模な新都市建設でもあった。

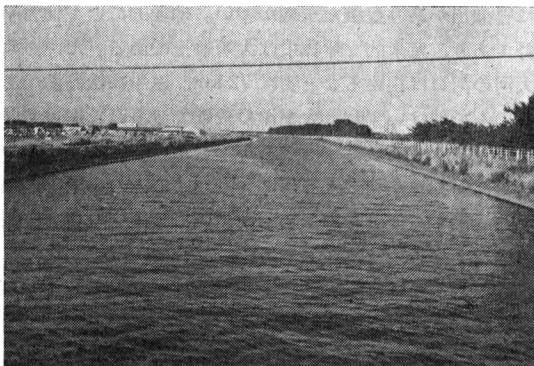


写真-1 貞山堀北幹線の現況

当時の生活用水は、もちろん井戸水であったが、人口が増え都市が大きくなるにつけ、町づくりに欠かせないのが排水、防火およびカンガイなどのための用水路整備である。古来、国を治め天下を平らげんとする者、常に治水、利水に心を砕いてきたところである。

川村孫兵衛重吉の四ツ谷ゼキの構想は、単なる100余町歩のカンガイ用水路の開削とは根本から異なっていた。仙台城下の建設にとりかかったころの仙台は、谷地、深田など低湿地の多い荒涼たる原野であったといわれる。山上清水、鹿の子清水などの存在はユウ水や泉が多いことを示し、同時に湿地帯であったことを裏付けている。したがって、四ツ谷ゼキ用水路の建設は、都市排水、生活用水、防火用水、都市美観それにカンガイ用水を併わせたものであらねばならなかった。

用水の取入れ口は広瀬川の上流郷六の付近で、広瀬川の左岸に位置して東へ進み、山をくり抜き、谷間には掛樋をかけ、大崎八幡の石段の下を抜けて、覚性院丁から下級武士の屋敷町北六番丁宮町へ、そして梅田川に注ぎさらに浄院堂付近で再びゼキ上げて台の原方面から流れ出る藤川へ合流するまで仙台を西から東へ貫流するのである。堀幅は4~6尺、深さは3~5尺、おおむね玉石で積み、要所には小水門を設け水量を調節するようになっていた。流水のほとりには並木が続き、城下町らしいしっとりとした風情をかもし出していた。

延長約6kmの本流が完成した後、天和年間(1680代)にかけて4本の支流が設置されて市街地を流れ、用水路としてのちのちまで役立つことになるのである。支流のひとつが藩校養賢堂(現県庁構内)付近を通る。ここには水路から導き入れた人工池が今に残っている。都市に公園の必要性を慮った慧眼がここにも見られる。

この堀が完成した正確な年次は詳かでない。天正2年(1645)に出された城下絵図には七郷堀、孫兵衛堀は出ているが、四ツ谷ゼキはまだ見えていない。時代が下って寛文8年(1669)の絵図には六郷堀とともに、郷六で取水し、八幡町の西から北六番丁宮町を経て梅田川に至るいわゆる四ツ谷ゼキの本流が部分的に表わされているので、この間に造られたことは間違いない。さすれば年代から考証して、この四ツ谷ゼキを築造したのは川村孫兵衛重吉とその養子孫兵衛元吉との合作であると判断される。

この四ツ谷ゼキ用水路も昭和の初めになると上水道の発達で防火用水としてもそれほど用をなさなくなり、また、市街地の発展とともに支流は埋められたり、地下に潜って下水になったりして次第に姿を消し、本流のみが農業用水路として細々と命脈を保ってきたが、受益地も

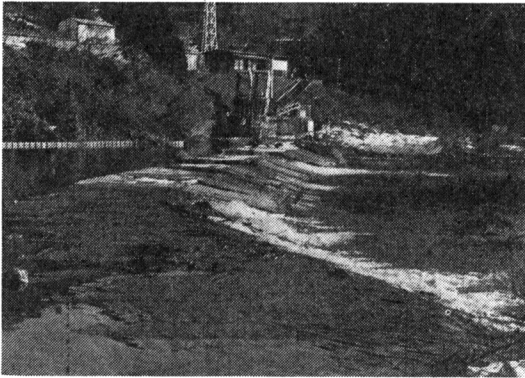


写真-2 四ッ谷ゼキ取水口の現況

市街化されたため、昭和33年から始まった仙塩工業用水道の建設とともに同水道の幹線用水路として利用され、農業用水としての使命には終止符を打ったが、日量10万tonの水量を送る動脈として再び役立っている。

### III. 北上川の改修と石巻港の開発

宮城県には北上・阿武隈の二大河川をはじめ、迫、江合、鳴瀬、名取、広瀬その他大小の河川がある。

ゆえに、一度洪水に際会するとその県民に及ぼす災害は甚大なものがある。

然して各河川の変遷史は、水害による復旧、改修、築堤あるいは新田の開発等、すべてが水と人間との闘いの歴史であるといつて過言ではない。よって、古来宮城県を治むるには、治山治水に政治の重点が置かれていた。各河川流域の農耕も産業も水産も、本県においてはかかる河川に大きな関連をもつものであり、したがって河川史は、農業史でありまた文化史でもある。

北上川改修工事は、孫兵衛重吉にとって実に一生をかけた大事業であり、正に乾坤一擲ともいうべき大計画であった。工事着手の元和9年(1623)は、孫兵衛重吉壮齢49歳に当り、その技術また円熟無礙の境に達したものと思われるが、さきに改修計画を樹てて発表するや、事は破天荒の重大案件であるがため、藩の重臣たちも鳩首協議の結果、異口同音一斉に冒険極まりなしとして強く反対を唱えた。しかし、重吉を信ずることの厚い政宗は、それらの群議に耳を藉さず断乎実行を命じたので、重吉もいたく信任に感激し、身命を賭する覚悟をもって工事の完遂を決意したのである。

ここで、当時の北上川の状況を説明しなければならない。北上川はわが国有数の大河で、源を陸奥国北上山に発し、陸中国の諸川を集めて仙台領陸前国に入る。流域宏大にして沿岸一帯は肥沃ではあるものの、流末本吉郡柳津の東南に至つて山峽曲折し、桃生郡相野釜を経て東

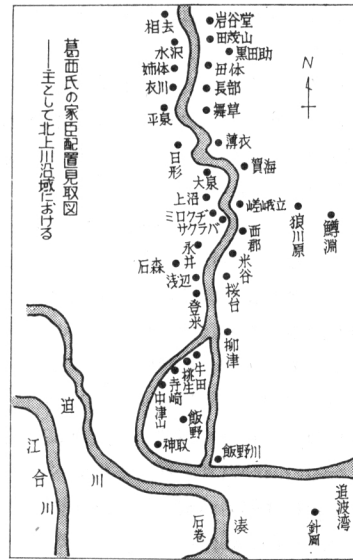


図-2 葛西氏の家臣配置見取図一主として北上川沿域一

流して追波川に至る所が著しく狭搾するため上流沃野は排水不良のため水害を受けることがしばしばであった。

河口の追波港は風濤險悪で暗礁多く、かつ牡鹿半島を隔てて太平洋にあるため、仙台並びに江戸への航行に不便が少なくなかった。すなわち、石巻は川村孫兵衛重吉によって開港される以前は、迫川が石巻に流下し、北上川は追波湾に注いでいて、石巻には流下していなかったのである。迫川の下流には、すでに湊、大瓜、南境の地に舟だまりがあった。

また、北上川の柳津と飯野川間は、現在の新北上川に類似した二又川の形態で流れていて、長面、釜谷、針生、横川、三輪田、福田の舟だまりがあり、対岸には牧野巢、中野、七尾、飯野川に舟だまりが見え、さらに現在の新北上川と称せられる地域には、柳津と飯野川に舟だまりが存在し、舟運の要路となっていた。この位置は、同地の旧領主葛西氏の舟だまりの配置とほとんど同様である。

政宗が葛西氏の配置をそのまま踏襲した理由は、軍事、経済、政治上から、そうすぐ簡単に旧習を破壊し得るものではないし、またそうすることが民政上の得策であったからである。このことは、葛西家の旧臣を多くの場合政宗は、大肝入または肝入として採用し、地方人心の収攬に役立たせていたのである。つまり、北上新川開削前すでに北上・迫両川沿岸に米穀運搬用の船舶が存在していたのである。

ここに、慶長16年(1611)9月16日付けの、セパス

チャン・ビスカイノの金銀島探険報告書（港湾探険記）がある。その中に、

『湾口に数島あり、港は安全にして200トンの船を碇泊せしむべし。翌日ミヤトに至る。大なる河同所を過ぎて海に注げり。河口砂をもって埋まり水深からず。』と石巻を紹介している。

この訳文の注として、ミヤトは湊で、大なる河は北上川と説明しているが、湊はそれでよいとしても、この年にはまだ北上川は石巻には流れてはいなかった。大河の北上川は当然迫川であるはずである。この裏付けとして、慶長6年の政宗黒印状を挙げておく。

『清水水の米432石4斗気仙へ相下し候 此船桃生の内十五浜横川の船合わせて25艘 この内5反帆3艘右の船共小牛田へ相のぼせ霜月十日前に気仙へ相下す可き者也 この外船10艘は佐沼へ橋板相のぼせ候に申し付候間此度は相やめ候者也仍如件』

文意は、清水水地区の米穀を気仙へ廻送するために、5反帆の舟大小25艘を小牛田へ到着さすべき旨の指令である。文中にある横川は、桃生郡福地村（現河北町大川）にあり『舟止日記』および寛永12年（1635）の『永沼文書』等にも記載されている船舶碇泊地である。

ここで小牛田までの水路を検討してみると、慶長6年にはまだ川村孫兵衛の北上川改修も、前述の貞山堀の延長の北上運河も着手されない時であったから、何度もいうように北上川は石巻に流下してはいない。ゆえに、小牛田に舟行するとすれば、玉造川すなわち江合川を遡行しなくてはならない。当時の江合川は、今の定川付近に流

下していた。今の定川は、貞亨中（1684～87）遠田郡の悪水を排除するために、青木沢を疎通して海に注ぎ定川と命名したのである。よって、十五浜および横川の25艘の船団は、当然その地から外海をう回して昔の江合川に達し、広淵付近から今の前谷地を過ぎ、ほぼ現在の江合川筋を経て小牛田に到着したものである。

文中『佐沼へ橋板相のぼせ云々』のくだりの佐沼までの河道は、石巻から和淵へ通ずる迫川を利用したものであって、この文書には北上川に関する事項は見えない。見えないということは、北上川と迫川が和淵で合流していないという意味であると解釈すべきであろう。つまり、北上および迫の両川が合流していたとすれば、簡単に横川から小牛田まで舟行できたのである。ちなみに、文中にある5反帆とはどれほどの舟かというに、1反の幅が3尺の葎帆であり、河川用小操と称された舟であり、だいたい米百俵内外を積むことができ、乗員3～4名位のものである。それが寛永時代（1624～43）にはどうかというと、すでに北上川は川村孫兵衛重吉によって伊達政宗の意図するが如くに改修工事が竣功されて間もないころであり、石巻の発展とともに北上川利用の価値が認められてきたころであった。米穀をはじめとし林産物、海産物の漕運に活発な舟行が開始されていた。このことは、密石取締りの法令が發布され、その他取締りの役所が北上川沿岸に設置され、ようやく本格的な河川利用の施設が完成されつつあったことでも判る。

さて、話は前に戻って孫兵衛重吉は北上川の柳津以東の河流を改修して水害を除き、石巻港を整え運輸の中心たらしめようと計画を樹て、山野を廻り、木を伐り、地勢の高低を測量し、夜に至れば役夫をして烽火をあげしめ、もって河道の曲直を定める工事に取りかかることになるのである。事業はもとより大規模の工事であり、巨額の経費を必要としたことはいうまでもない。しかも、当時の藩財政は兵乱の直後のことだけにこのような工費に堪えるだけの余裕があらうはずはなかった。したがって、重吉はまず沿川付近をはじめ、領内各地における富豪篤志者を説得して資金の借入れに奔走せざるを得なかった。それと同時に河道や水位、水量の調査も怠ることはできなかった。何しろ相手は名うての暴れ河である。計画は慎重のうえにも慎重を期さねばならない。どうやら資金繰りの目当てもつき、いよいよ本工事に着手した。

工事中は現場に臨んで人夫と寝食をともにしながら、鋭意監督指揮し、しかも下情に通じる重吉は役夫を遇するにきわめて懇切をつくし、各帳場の風呂場を開放してその日の疲れをいやしめ、かつ一定の賃銀の外必ず酒肴まで振舞って労苦をねぎらったので、多くの人夫たちも

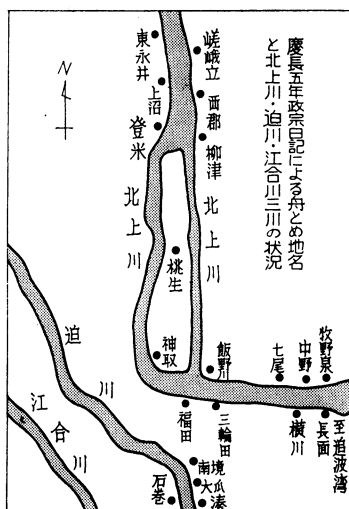


図-3 慶長5年政宗日記よる舟とめ地名と北上川・迫川・江合川三川の状況

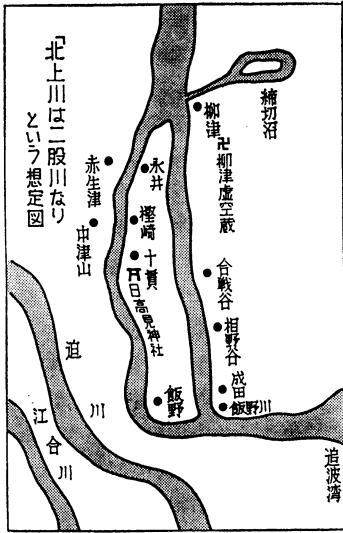


図-4 「北上川は二股川なりという」想定図

その仁徳に悦服し競って精を出したため、工程も予想外に進捗を告げて起工後僅か4カ年にして首尾よく完成を見たのである。

ここで重吉の北上川改修の実績をたどってみよう。北上川は柳津で二又となり東西に分岐する。二又となつては水量も二分され舟運にも不便であったので、西流すなわち永井、櫻崎、十貫、新田までの河道を、上流茶臼山の付近の今の脇谷地方で遮断した。このことは種々の条件を勘案して行われたものであった。すなわち、柳津から飯野川までにまとめてしまったのである。水量はたしかに倍加したが、柳津・飯野川間の狭隘部は倍増した水量と水勢のため急流はなお激しく、ちょっとした降雨にも下流地帯の被害が甚だしく増加することになってしまった。

この悪結果には、さすがの孫兵衛重吉も参つたに相違ない。しかし、事ここに至っては傍観することはできない。最後の手段を採るより外に道はなかったのである。その最後の手段とは何かというに、う回河道の構想なのである。すなわち、

1. 柳津と飯野川を遮断する。
2. 江合・迫両川を合流せしめる。
3. この合流に一度遮断した北上西流を復活せしめて、三川の合流を思考する。

以上の構想は、先の場合よりも一層の冒険である。もし、この工事が万が一にも失敗に帰するならば、しかも一朝大水に見舞われた場合、下流地帯の耕土は怒濤のような三大河川のぼう大な水量に呑まれ、何万町歩にも及ぶ耕土と民家は一瞬にして泥土の中に埋没することにな

るのである。孫兵衛重吉としては必死懸命の工事であつたらう。

重吉は、江合川と迫川との合流を第一に着工したのである。第1期として江合・迫両川の合流、第2期としてこれに北上川を合併せしめたのである。『和淵風土記書上』等からして、江合・迫両川の合流水量を石巻港に流下したのは元和2年(1616)となる。そしてこの影響と結果とをつぶさに観察検討したものであろう。実に江合川と迫川との合流はひとつの重要な試案であつた。平水と増水との水勢、水量の比較、カンガイ、漕運等を考察し、細部にわたる研究と実験が行われた。

今、この地方に孫兵衛重吉の苦心を物語るいろいろな伝説が残されていることを見ても、その苦勞のほどが察せられるのである。この第1期のテスト工事が成功するや、第2期工事として一度締切つて遮断した西流を、柳津からその旧流路に修正を加えつつ回す工事に着手し、第1期工事竣工後5～6年にしてこのう回河道工事が完成された。

これで江合・迫両川の合流が成り、北上川のう回河道も完成し、人々は大いに満足したのであるが、倦むことを知らぬ重吉は、いよいよ本稿でのテーマとして挙げた北上川の石巻港への開閉流入を計画実施したのである。これを『牡鹿郡誌』は次のように伝えている。

『孫兵衛重吉柳津より神取まで48町新たに河道を開き、もつて江合、迫二川の水流を合わせ勢に乗じて流下せしめ桃生鹿又に至り分ちて両道となし、一は南流2里半牡鹿の湊に流入せしめ、一は新河をうがつこと1里辻堂を経て相野谷に至る。しかしてその柳津相野谷山峽の故道を塞ぎ、もつて今日の河道をなせり、古牡鹿湊の水流は迫川と真野川との合流のみなりしが、重吉元和9年より寛永3年に至るまで4年間において、桃生郡鹿又福田の中間より本流を南下せしめ原野を掘削し堤防を築き牡鹿郡稲井に至りて真野川と合わせしめ門脇に至りて海に注ぐ。しかしてその河流たる能く水勢を殺ぎ舟筏を

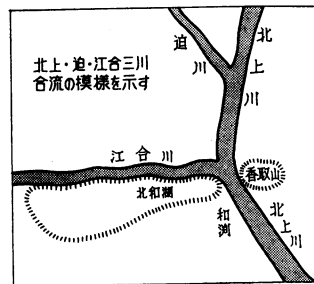


図-5 北上・迫・江合三川合流の模様

通じ漕運に便利にしかつ洪水汎濫の憂いを防ぐ等当初の設計と少しも違うところなく、これより石巻は一変して船舶輻輳の都会となり、地形もまた大いに前と異なるに至れり。(下略)』

もはやこの説明は蛇足であろう。ここにはじめて北上川は柳津よりう回河道となり、和淵において江合川と迫川を合わせ、辻堂においてさらに2派となり一方は追波湾に、別の一方は石巻に流れて行くのである。この工事後の結果、石巻からの舟運は南部領盛岡まで可能となり、その被むる恩恵は実に大きいものとなった。

一寒村にしか過ぎなかった石巻および湊は、ともに開港場としての基礎的な性格を持ち始め、年とともに股脈を極めていった。それにもまして、流域の氾濫は目に見えて減少し、利水施設も整ったので、農民は安心して農耕に精励でき、新たな開墾も日ごとに進捗を増したのである。

川村孫兵衛重吉は、工事一段落の後は新采地大鉤に居宅を設け、ここを墳墓の地と定めた。当時の大鉤村は茫茫たる草原野地となっていたが、重吉は老後を養いながらもなお荒地の開墾に努めた。このことは寛永8年(1631)2月10日付けの重吉の墾田検地許状からも明らかである。すなわち、新塩釜の分拾七文をはじめ大曲、

門脇、蛇田、須江の4カ所合わせて30町歩の新田を開墾している。みずから手がけた北上川新河道の右岸の地域である。

正保年間、2代藩主伊達忠宗が牡鹿半島遊猟の帰途、わざわざ駕を曲げて釜(大鉤)の川村家を訪れ重吉を慰問したことがある。重吉すでに頽齡70余、藩公の来訪と懇ろな慰労の言葉に深く歓喜感激のあまり、その邸宅を永く居住に当てるのは憚りがあるとて、これを解体して菩提寺を建立することになった。しかるにその希望も空しく慶安元年(1648)閏10月27日、行年74歳で卒去した。二代孫兵衛元吉が養父の遺志を継いで解体し、改めて一字を建立のうえ石巻の真言宗寿福寺住職有弁法印を講じて開基したのが大鉤山竜観院普誓寺である。

以上、川村孫兵衛重吉の数多い功績の中から代表的な事業2~3を挙げて重吉の紹介に替えたが、後年大正4年11月10日大正天皇即位の大典に際し、宮内省は全国の先覚功労者に対し特旨贈位を行ったが、この時重吉も正五位の贈位記を賜った。

時の石巻町長石母田正輔は、釜区民らと謀り、この栄典を記念するとともに故人の功績を讃えるため位記を祭神とした重吉神社を創建している。

—昭和55年11月、石巻市の北上川畔に重吉の偉業を



写真-3 現在の北上川の現況

偲ぶ一団の人々が集まっていた。長らく不明だった重吉の子孫も北海道から招かれて来た。孫兵衛重吉の記念碑の除幕式である。折しも稀有の冷害の秋である。

苦難に直面すると重吉の偉大さが改めて見直されるのである。

重吉には男の子がなかったので加藤喜右衛門頼定の三子を養子に迎えた。これが川村孫兵衛元吉である。加藤喜右衛門頼定と重吉のつき合いは、孫兵衛重吉が藩命を受けて河川工事遂行のために石巻へ移住した際、はじめて草鞋を脱いだのが加藤喜右衛門頼定の家であった。頼定は禄400石の藩士で、孫兵衛一家を遇すること非常に厚いものがあったので、孫兵衛もこれを徳として後年養子縁組みの関係となったものであろう。孫兵衛元吉も養父に譲らざる藩政の功労者であった。

元吉は承応2年(1653)伊達忠宗の命で江戸番となり、次いで支封(常陸国)竜ヶ崎の代官や郡奉行を勤めるなどを歴遷した後、石巻に戻るや先代の遺鉢を継いで専ら土木水利事業にたずさわった。とくに天和年間(1681~83)、中津山上流各所における北上川の改修工事はその手によって施行されたもので、これは先代孫兵衛の工事後河状に変化を来し、しばしば洪水の災害を蒙るに至ったため防御策として行われた改修である。元吉が工事を担当した時も藩の財政不如意のため、藩重役の連帯保証を得て領内各地の素封家から工費の借入れを行った。天和2年と3年の日付けの証文が現存している。これによって元吉が改修工事施行にあたり工費財源の狩り集めにいかに苦心を払ったかがうかがわれる。

元吉の功績について『東藩史稿』に次のように記されている。

『元吉智術をもって称せられ能く民事に通ず、府下大雨毎に水溢れ民これを患う。元吉地脈を察し、溝を城東6里ばかりの外に通じもって府下の水を導く、民大いに喜ぶ、かつ東郊諸田稼穡また熟す。海浜諸田海障のために害せらる。元吉松を植えてこれを遮蔽しその患を除

く、云々』

元吉の業績もまた枚挙にいとまないが、1例だけを紹介しておく。

#### IV. 伊豆野ゼキの開発

伊豆野ゼキは水源を一迫川に求めている。

一迫川は源を宮城県北の屋根栗駒山の西8合目の虚空蔵山の湿草地に発して、延々と花山の峡谷を縫い、いわゆる一迫郷の平野を東流し、幾多の小支流と草木川、長崎川、二迫川および三迫川の諸川と合流して迫川となり登米郡に至って北上川に合する。

伊豆野ゼキは、取入口をその中流一迫町清水袋地内に設け、用水を分流したもので正保3年(1646)に開発されたものである。寛永19年(1642)藩主伊達忠宗が広袤数里にわたる伊豆野の原頭で鷹狩をした際、この平坦肥沃の荒地を御供先で寵臣であった要害拝領の古内主膳重広に賜り、その開拓を命ぜられた。当時の鷹狩とは大名の勇壮な娯楽であると同時に、地方における民情視察で孝子、節婦、義人などを見出して褒賞したり、封内の富を致すべき未墾の土地の発見視察をも兼ねていた。ことに忠宗は父政宗の戦国時代以来百戦の経験の後を継ぎ賢を挙げ能を用いて、大封伊達氏磐石の基礎を据えた賢君で郡誌によると、寛永16年(1639)、同19年、明暦3年(1657)と少なくとも前後3回栗原郡を巡視している。

忠宗の命により古川主膳は、仙台藩内に幾多の土木事業の大工事に経験のある専門家川村孫兵衛元吉にこの用水ゼキ開削の設計施工を依頼した。川村孫兵衛元吉は、実地踏査の結果、在来、長崎川を一迫村真坂の吉淵で締切り南流させ台水門辺で昔川と合わせ山麓を縫って東流し、築館村達磨淵に至る用水堀があるのに着目したが、この用水では堀口村、八樟村、沼崎村、梅崎村、刈敷村さらに伊豆野新町まで延ばすには余りに水量が貧弱なのでこれをあきらめ、百方苦心して取入口を一迫川の清水袋に求めることにしたのである。

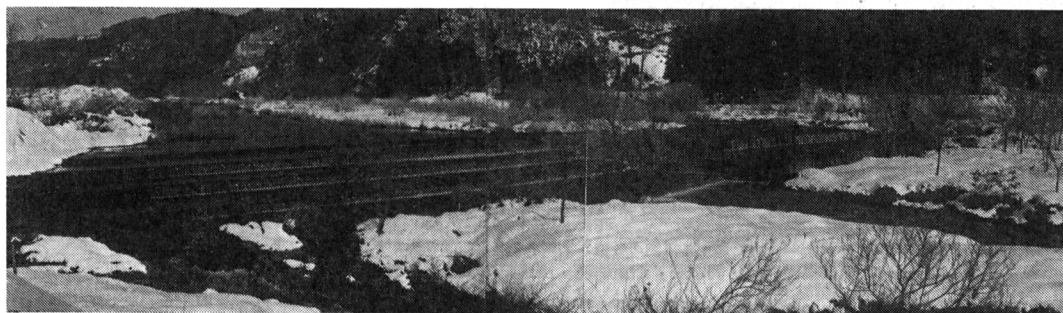


写真-4 伊豆野ゼキ取入口の現況



当時の人々の頭脳では、清水袋の水面と台水門辺の高低、大水門辺と築館との高低、築館と堀口上野辺の高低等がはっきりつかめないで、多額の経費と人力を費して開削しても果たして用水が東流して役に立つかどうか元吉の計画は疑問視された。しかし、元吉の欧法測量の成果を信ずる古内主膳は敢然とこれを押切り、自身は奉行の要職にあったので重臣をして関係諸邑の農民を動員せしめ、正保元年（1644）工事に着手し諸役を督励して竣工を急いだが容易の事業ではなかった。数千人の夫が懸命に従事して、満3カ年目に伊豆野までカンガイできるように開削されたのである。かくして一迫川の水を清水袋で揚水するこの工事は計画以来5カ年を要して通水に成功した。

このセキは伊豆野の新田開発が主目的で開削されたのであるから以来伊豆野セキと呼ばれている。用水路の延長実に5里11町、カンガイされる美田は2,000町歩余、当時においてこの用水利用のため収量15,000石と記録されている。この伊豆野セキは、明治14年溝キヨを改修

し、また、明治22年9月の出水で甲門が流出し翌23年新甲門に改築されるなど、その後改修工事が何回か施されたが今に至るも当初の計画どおり利用されている。

もって孫兵衛元吉冥すべしといたい。

ちなみに伊豆野セキの現状は、次のとおりである。

頭首工の種類	堤体水叩共木工沈床 外体コンクリート被覆
--------	-------------------------

受益面積	2,134.3 ha
------	------------

取水量	4.98 m <sup>3</sup> /sec
-----	--------------------------

孫兵衛元吉、元禄5年（1692）8月14日69歳で世を没す。爾来ここに290年に近いが、二代にわたる川村孫兵衛の名を知らぬ宮城県民はまずいない。

#### 引用文献

- 1) 宮城県史 第8巻（土木）
- 2) 石巻史市 第2巻
- 3) 宮城県人物誌 歴史図書社
- 4) 郷土人物号 宮城県教育会編
- 5) 四ッ谷履雑感 山田清三郎（1979）
- 6) みやぎの土地改良 宮城県農政部耕地課編（1969）

[1981. 1. 8. 受稿]